

24 地域コミュニティの意識に関する調査研究

－浦河べてるの家は地域とどのような関係を持っているのか－

研究所障害福祉研究部 八巻知香子・河村宏

【浦河べてるの家に対する浦河町内外からの評価】 浦河べてるの家の活動は、精神障害者の当事者活動を軸とするサポートシステムを備えているという点において、障害福祉分野において極めて高い評価を受けている。べてるの家への見学者は年間 2000 人をはるかに越え、全国各地からの講演依頼も殺到し、毎週のようにあちこちでべてるの家のメンバーやスタッフを招いた講演会が行われている。一方、町民がべてるの家の活動をどのように評価しているのかについての内実は触れられることなく、浦河町は精神障害者が病名を明かして生活できる町として評価される傾向にあった。

本報告の目的は、浦河町の住民が、べてるの家の活動やメンバーをどのように評価しているのか、それは防災への取り組みを進める過程においてどのように変化しうるのかについて、これまでの活動を報告することである。

【方法】 浦河べてるの家の共同住居周辺に居住する住民への面接調査、行政担当者に対する聞き取り調査、モデル地区として防災活動に取り組んでいる2つの自治会活動中のインフォーマルな聞き取り調査ならびに浦河べてるの家のメンバー、スタッフへの聞き取り調査での逐語録およびフィールドノート(2004年1月から現在)をデータとした。

【町内での評価】 昨年度にも報告したとおり、べてるの家に対する目だった排斥運動はなく、商業地域の住民からは近年のべてるの家の集客力についての肯定的な評価も見られたが、ゴミの出し方、小火等の個別のトラブルに対しては強い口調で非難が語られた。道・町の福祉行政担当者はいずれも「外から高い評価を得ているとしても、必ずしも全ての住民がべてるの家の活動を歓迎しているわけではない」との見方を示した。しかし、個々のメンバーとの接触がある住民は、非難を口にしながらも同時に一人ひとりへの理解を語った。

【自治会単位での防災活動への取り組みの経過】 対象となった2つの自治会のうちの1つはべてるの家の共同住居が多数含まれる地区である。その地区では、共同住居が自治会に未加入であったこと、ゴミの出し方をめぐってトラブルがあったこと等により紆余曲折があったが、防災活動にはべてるの家のメンバーの参加を歓迎することが自治会役員より表明された。本年8月の防災訓練にべてるの家のメンバーが1名ではあったが参加したことは「ちゃんと来た」として肯定的に評価された。また、11月15日の津波注意報(前報参照)を受けて、べてるの家のメンバーのみ15人が自主避難を行ったことは、町の行政担当者からは「よく避難してくれた」という評価を得た。「命を守る」という取り組みは排除を招きにくく、結果的に顔を合わせる場面が生まれている。

この取り組みはまだ経過途中であるが、べてるの家及び精神障害者に対する住民の評価が変化しうる可能性を示唆していると考えられた。